

最初の例会のころ

山下 次郎

今回、日本物理学会九州支部の支部委員長小田垣 孝教授より「会員の思い出から」に投稿をするようにとのお誘いを受けましたので、九州支部における最初の例会につきまして思いつくままに書き記すことに致します。思い違いもあることは存じますが、ご容赦下さい。

当時の記録によりますと、第一回例会は昭和21年9月22日に開催されています。会場は九州帝国大学理学部第一号館第一講義室と記してあります。当時のことを御存知の方々には、あの松林の端に建っていた木造平屋のバラック建物群の中の一番大きな建物の中が一番大きい教室（収容能力約200名?）が思い浮かぶことと存じます。

九州帝国大学理学部は昭和14年に九州帝国大学に新しく付置されたものでありまして、物理学科と化学科と地質学科との三学科から成っていました。翌15年に数学科が加わりました。昭和14年当時の我が国は日中戦争の最中にありまして、大学卒レベルの理科学技術者の深刻な不足に悩んでいたにちがいません。九大に新しく理学部が設置されたのも、その前年に名古屋大学に理学部が設置されたのも、そのような社会状況が背後にあったのだと思います。わたしは物理学科に入学した第一期生の一人でありまして、昭和16年12月に大学を卒業し、太平洋戦争中からそれ以後昭和22年3月まで武藤俊之助教授の研究室に大学院研究生として存在していました。

さて昭和21年に、日本物理学会九州支部が設置されたという出来事は当時の我が国を風靡した民主化運動という社会現象の一つの現れであったことは明らかであります。実際この時から後何年か間に日本物理学会の組織や運営の仕方は著しく改変され、それが今日に及んでいるわけであります。支部の設置とは今日またやかましく言われている地方分権という現象であったのでしょうか。

日本物理学会に九州支部が置かれ、そこで研究論文を発表し、討論する例会が開催されるようになったということは、九州在住のわたし達物理学の研究者にとって非常に好ましいことであったことは明らかです。しかし率直に申しまして、わたしには九州支部発足という出来事に対して特別な思い出がないのです。それは当時九州大学を覆っていた全く特異な雰囲気によるものにちがいません。その雰囲気を造り出した一連の出来事は、これもまた一つの民主化運動であります。物理学会とは何の関係もないことですので、とくに申しあげる必要はないと思いますが、当時九州大学に在職あるいは在学されていた方々であれば、これだけのヒントで十

分であると存じます。これは、戦後間もなく大学紛争が九州大学の医学部に始まり、またたく間に全学を巻き込んだという出来事でありまして、これは後に全国の大学に吹き荒れた大学紛争と形式においてはよく似たものでありました。(勿論紛争の直接の原因は全く別であります。それは戦時中における大学人の戦争協力という問題でありました。紛争の担い手は学生ではなく、医局また教室の若手研究者でありました。)

しかし先程申し上げましたように、わたし達の理学部は発足したばかりであり、そこには学会や軍部に名の知れたボス教授も居りませんでしたので、ある有名教授を中心とする戦時研究グループなどは存在しませんでした。そこで理学部においては、とどのつまり、戦時中から戦後まで引き続いて理学部長の職におられた西久光先生が責任をとられる(?)という形式で学部長を退任され、事は収束いたしました。それから50年後の今日においても、この形式はまだ生き残っているようです。とにかく暗い思い出というものは明るい思い出よりもいつまでも記憶の中にその力を保っているようです。

さて最初の支部例会のことにになりますが、例会を開催する以上はその準備のためのいろいろの仕事(講演論文の募集、勧誘、プログラムの作成など)が必要なわけです。先生がたがそのようなことをなさったはずはありませんから、助手と大学院生とでそれをこなしたにちがいないのですが、そのことについては全く記憶がありません。第一回例会のプログラムを見ますと、12題の講演が行われています。このうちで一つだけが気象学史に分類される仕事であると思えますし、他の一つは物理数学に属する仕事であると思えますが、その他の10は物性物理学に分類される仕事ということになるでしょう。申し遅れましたが、九州支部とは称しながら、当時の九州支部は山口県と広島県を含んでいたのです。山本先生が宇部工業専門学校から、また平原先生が広島工業専門学校から参加されています。

九州地方からは、九州大学より他の学校からの講演者の姿は見えません。これは現在の姿と大きな違いでしょう。また現在においては、多くの製造会社が独自の研究所を持っており、研究発表に参加しています。

当時の九大においては、物理学研究の主体は物理学教室の理論二講座(原子核、固体物性、統計力学)、実験三講座(光学、固体物性、原子核)、地球物理学一講座に属するメンバーと、工学部に存在した力学教室に属するメンバーでありました。昭和16年(1941)という年には年半ばから外国雑誌はもう来なくなりましたから、研究者は新しい情報に接することができなくなりました。その年の12月に太平洋戦争がはじまりました。そのような状況の下でも、物理学教室や力学教室の研究教育活動は19年の夏ごろまではほぼ平常通り行われていたように記憶しています。一例を挙げますと、武藤教授の指導の下で理論物理のセミナーが土曜日の午後に行

われており、当時は半導体物理の論文講読が系統的に続けられていました。そこには原島教授（理論）のグループも、大森教授（力学教室）のグループも、岡田助教授（実験）のグループも参加しており、また佐賀高等学校の平原先生も毎回出席されており、なかなか賑やかでありました。また原島教授のグループは（金属を除く）簡単な構造をもつ液体の物性を原子論的な立場から統計力学の手法を用いて研究されていました。大森教授のグループの研究も同じく液体論でありました。つまりその時代（昭和17-19）の研究成果が第一回の例会に発表されているということになります。ちなみに、昭和20年という一年間は全くのブランクであったと思います。昭和21年という年にも研究活動はまだ回復していませんでした。

最後に、当日のプログラムを見ながら、思い浮かぶことを三つ書きつけておきましょう。平原先生と岡田先生とが、亜硫化銅、亜酸化銅、沃化銅の電気的性質について実験研究の結果を報告しています。亜酸化銅 (Cu_2O) というのは当時結晶整流器に用いられていた代表的半導体の一つであったのです。それでこのプログラムは当時九大の半導体研究者たちが酸化物半導体の研究に専念していたことを語っています。わたしも武藤先生のご指導の下で亜酸化銅の電子構造の理論的研究をやっておりました。勿論わたし達も、シリコン、ジャーマニウムという単体結晶の半導体が存在して、おなじく結晶整流器として役に立つことは知っていましたが、それが半導体物理研究の中心に位置しているということは全く知りませんでした。後になって、Phys. Rev.をはじめとする外国雑誌が手に入るようになり、わたし達があわてて半導体物性の勉強のやり直しをはじめたのは昭和22年のことで、わたしが東京に移ってから後のことです。

当日のプログラムの最後は伊藤得之助先生（地球物理学）の「パトリックスについて」です。マトリックスに相対するパトリックスは伊藤先生の独創になる数学形式でありまして、先生が戦時中の（つれづれなるままに？）考案されたものでありまして、先生は大変にお得意で、わたしなども詳しく説明していただいたはずなのですが、今となってはその内容を思い出すことができません。

当日のプログラムの中で唯一つ風変わりな講演は、山本武夫先生（宇部工業専門学校）の「万葉集にあらはれたる一つの台風資料について」でありましょう。台風と博多湾といえば、かの神風台風が余りにも知れわたっていますが、山本先生の研究によりますと、万葉集の中にいま一つ、北九州に大きな台風が襲来したということを示唆する記録が読みとれるということなのです。これは強度に想像力を働かせた、しかも文学の香り豊かな名講演でありました。わたしはその時「時計係」をしていたのですが、お話があんまり面白かったものですので、定刻が来てもサボタージュをして、ベルを鳴らさず、お話を聞いておりました。山本先生はそれでおそらく30分あまりお話になったのかも知れません。